

木村里風子 選

特選

今は亡き母のにおいの藺座布団

県立千代田高等学校二年 服部 純平

【評】 藺草で編んだ座布団は冷たく気持のよいもの。母が好んで使っていたのである。今は母を偲び使っているのである。

特攻のこの海見れば父の顔

呉市立川尻中学校三年 渡邊 光祿

【評】 先の大戦末期は人間が兵器もろとも突入した。南海で戦死した父、海を見ると悲しくも尊い生命を感じた。

久しぶり亡き祖父に会う夏休み

県立三原高等学校二年 内田 遥斗

【評】 祖父と会う。亡き祖父との絆が深いのである。

ゆつくりと季節を運ぶかたつむり

呉市立呉高等学校三年 中谷 美桜

【評】 かたつむりの歩みから季節を感じた感性の豊かさ。

盆になり天から曾祖母帰省中

呉市立仁方中学校一年 宮口 陸翔

【評】 思いつきがよい。奇知に富んだ発想が帰省中である。迎え盆で先祖を迎える。曾祖母も急いでいるであろう。

入
選

汗かいてペットボトルが軽くなる

県立三原高等学校二年 五阿味直斗

茜の陽海に沈みし光と影

県立広島皆実高等学校二年 難波 日和

まっしろなスニーカーが春を呼ぶ

広島市立三和中学校三年 岡田 瑞希

金魚すくい鼻緒の痛み気にとめぬ

広島市立三和中学校三年 西本 紗雪

仏壇に林檎が香り祖父想う

呉市立川尻中学校三年 橋本 奈々

自分でね育てたトマト世界一

廿日市市立佐方小学校四年 極楽寺悠大

紅葉はまさに神秘のグラデーション

廿日市市立佐方小学校五年 溝越 颯明

竹の子は親の近くに立っている

廿日市市立佐方小学校六年 後藤 順太

つゆ草がかぜにあたっておどつた

府中町立府中小学校二年 金子 治基

はすの花水面うつってきれいだな

府中町立府中小学校三年 長井優理名

かたつむり大雨の中動いてる

咲きほこるアジサイの花雨もよう

帰り道足もとにさくスミレかな

満月はなぜ丸いのか不思議だな

赤い海秋の夕日が写ってる

森の中涼める音は滝の音

日やけはね夏のおはだの衣がえ

山の中自然の匂い風薫る

府中町立府中小学校四年 高山 圭祐

府中町立府中小学校四年 實光 華音

府中町立府中小学校四年 篠本 花歩

府中町立府中小学校五年 兵頭 佑飛

府中町立府中小学校六年 別府 ころ

府中町立府中小学校六年 井上 雄斗

府中町立府中小学校五年 矢田 絢音

福山市立誠之中学校三年 坂本 真海

木村里風子 選

特選

継ぐ人の無き山畑へ大根蒔く

広島市 小都 妙子

【評】 農家の人不足を如実に、継ぐ人がいなければ自分がすることになる。農業が身に付いているのである。

見守れる母もずぶぬれ水遊

福山市 世良 正子

【評】 水遊びに夢中の子の仲間に入った母親。子とよろこび合っている声が聞こえてくる。

酒蔵の裏に雁木や花菖蒲

安芸高田市 山下 和子

【評】 酒蔵の裏は川であろう。雁木は船の発着場所で荷上げ、荷送りをする。豪商の酒造家におどろく。

夏休み言葉探しの旅に出る

広島市 寺澤 紀子

【評】言葉探しとは言い得て妙。地方には地方の訛がある。知識は豊富に得るためである。

返り打ちくらふ将棋や涼み台

広島市 徳毛 佳美

【評】将棋に熱が入っている。詰めまで迫ったが、どんでん返しに。くらふは悔しさである。

入
選

螢火となりて戦死の祖父還る

庄原市 古家八千代

逝く秋の浜に朽ちたる捨小舟

福山市 戸原 澄清

会へぬまま野辺の送りや彼岸花

三次市 林 章子

草刈りや独り語りつ妻の墓地

広島市 坂下 人寿

梅雨さむや眠る二歳に蹴られたり

広島市 熊谷 純

幼手に夢託したり桜貝

広島市 蒲池 正

出格子に朝顔の蔓老舗宿

廿日市市 辻 恵風

コンバイン日本の秋を刈り取りぬ

福山市 岩元 剛

田水張る地球平らに千枚田

庄原市 永宗 敏昭

朝顔や空は静かに青くなる

広島市 下末かよ子

たばこ屋の早々しまふ夕河鹿

福山市 嶋山 洋子

乾涸びてなほ縋りをりかたつむり

尾道市 原田 道枝

父の顔知らで八十路の終戦日

広島市 松田 郁子

バス停は杉の丸太や青葉光

広島市 川本三栄子

水替への手に柔らかき金魚かな

呉市 宮首美代子

生と死の話の尽きぬ端居かな

東広島市 山田美佐子

秋澄むや雲のただよふ潦

呉市 大林 達郎

軒下の燕発ちゆく茜雲

広島市 松本壽賀子

初咲きの朝顔今朝の空の色

福山市 坂田 尚子

来賓の末席並ぶ花田牛

福山市 内田 千年